

所属	生涯福祉研究科 生涯福祉専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	大野 裕子	指導教員 (主査)	須加 美明

論文題目	家族介護者のコーピングと介護に対する意識の関連
------	--------------------------------

本文概要

目的

在宅で家族を介護する家族介護者に関する先行研究では、主に介護負担感や介護肯定感等の、介護に対する意識を測定する尺度の開発と、それらを規定する要因の分析が行われてきたが、家族介護者の介護に対する意識と、介護継続意思までのつながりを表す因果モデルを作成し、検証した研究は非常に少ない。本研究では、ラザルスのストレス理論に基づく先行研究で多く採用されてきた、認知的評定を負担感と置くモデルが適切であるかどうかを検証するとともに、家族介護者のストレスサーが、コーピングを介して介護継続意思につながる因果モデルの作成を目的とする。

方法

本研究の調査対象者は、在宅で介護する家族のうちの主介護者とし、配布した調査票 276 件のうち、回収した 113 件 (40.9%) の有効回答を分析した。ストレスサーが負担感に影響、その負担感がコーピングに影響するモデルと、ストレスサーがコーピングに影響し、充実感を介して介護継続意思につながるモデルの 2 つについて、共分散構造分析を行い比較した。

結果

ストレスサーが負担感に影響するモデルは、RMSEA が .074、CFI が .767 で、いずれも受容できる範囲であったが、介護継続意思の決定係数が .06 と低く、モデルとして成立はするものの、介護継続意思との因果関係を表すモデルとしては不十分であった。一方、ストレスサーがコーピングに影響するモデルは、RMSEA が .072、CFI が .828 と、いずれも受容できる範囲であり、介護継続意思の決定係数は .32 であった。これは、十分に高い値とは言えないが、極端に小さくて、因果モデルとして意味のない値という訳でもなく、介護継続意思につながる因果関係を示した本モデルは、実際に収集されたデータの構造を表していると思われた。

考察

介護が日常化している家族介護者では、ストレスサーが直にコーピングに影響するモデルもありうること、またこのモデルでは、介護継続意思がある程度説明できる数値を示し、因果モデルの一つになりうることが示唆された。

今後の課題

本研究では、介護場面における認知的評定をどう捉え、測定すべきかについて独自の尺度を示すことはできていない。家族介護者の認知的評定を測定できる尺度を開発し、介護継続意思の因果モデルを検討することが、今後の課題である。また、家族介護者の健康や、健全な生活の維持を支えるための支援のあり方の追求につながるような、家族介護者の介護に対する意識の因果モデルの分析を進めていきたい。